



菟道園二

1456
2



門へ遠 13
1486
卷 2

圃老巷説菟道園第二卷

美源二奥州北芝田次郎を窺事

白統綱ひらふらふのわ惟わ洪わ魚わ塙わ城わはわ吸わるわ此わ理わとわかわやわ正わ治わ二わ年わ此わ契わ梶わ系わ
平三景時せいさんをわ雲わ北わ勢わつわきわ運わ命わ既わはわ跋わ及わ抵わ崎わ乃わ路わ改わり
傾わきわさわるわ王わ様わもわ叛わ逆わ同わ意わのわ孝わ進わ捕わあわるわ辱わきわりわ一わ将わ軍わ
家わ北わ作わ巖わちわのわ自わ以わ奥わ州わのわ任わ人わ芝わ田わ次わ郎わとわいわふわのわ系わ附わ小
敷わきわ要わ害わをわ治わめわ墨わをわ深わくわてわ乞わ士わをわ扣わくわ由わ笑わへわれ
仔細わをわ尋わ問わせわんわたわめわ使わ節わ度わくわよわ及わふわとわいわふわもわ病わ中わ
稱わしわるわはわ應わぜわばわあわらわかわりわてわ工わ藤わ行わ光わ子わ作わしわ芝わ田わりわ
矣わ吾わをわさわらわせわるわ小わ行わ光わ上わ意わをわ取わるわ王わ家わのわ子わ北わ中わ
りわもわ美わ源わ二わとわいわふわ武わ勇わすわぐわきわ思わふわもわ深わきわりわのわ由わ



密に上意の旨をさし 敵地の悪びの幾上虎の跡を
料るかさしと家不秘差の鬼社をまうらしたる花就と
のる靈紐をおとす真夜へど下しるは保二ハ大功の密事
小あつふふ人子二あき旅刀を揚るこそ身は面目あき少く
産躍し一昂一針をめぐらし 東京北赤の多産産漂泊
したるさぬは促装若宮大路の家をまると終よあら出
公川乃岡路は所 かるはは生れ末なるよまふ及産産か
く降すさみ産夜綴属つ 鄙乃長路をわらうと
彼地は下著し一國元の宿れ遠すを敵乃動静伺ふよ
便ちのうんと東西は徘徊し やうて用暇あふ打火店よ
止宿せんるををひく長途の方をやけめぬ家らまき

子十(イ)あまの里れを女として三寸とりの娘乃母の秘事此
舟をわらうをを養へるは原二の産中此産林もよおかれ
昌風乃ん地として例をうらみあやみられはまは女世も
憑交つしつと客の教方の人とえまひせしり一夜此
宿をまつはるもつ流すを結んん易おあひ病
しきあつひ食れは味をのあり何れもあまきよさき
あぼふんをのあおろしつてのひあつしきとえを密に
との汗穢とおぼさの娘は調をまつてをせちんとなつ
つて鄭重よめしつてこれの原二も昔情を謝は
娘の三寸も枕ちかく居よ金具よ夕よのつるかづく
うらら原二も骨幹乃うららけしき不安達乃生つら

にかまふんあれど心地よとひつづききしりもあつて
 片意の思を源よとあつたかゝる英源二も病もあつたり
 日次よりりたまふて病中これ枕よ甘んぐたる遠路を
 かきあぐりちつりまひせんとなふは情をあらめ
 といひつづきは英源二も守か天竺の國を移るは
 其雨を催しよぬかふる芽中よい実よ移鶴よ廿
 乃在りてと心申よとてい移此れのみとて下
 つつとあつたかゝる山の時を移是乃床よとてあ
 て水よりぬ中ととありよとてかくて移此れもあ
 かひよ英源二もちとけて三守よ向ひ来り京來よ
 仕りりと仔細ありて此年月漂泊の身とあまり後

小島國の芝田友士をかく由は傳りて下つれども
 知已かたきは本縁と實を求るもかゝる事のあつて
 良信あは身の幸ひめんとてい三守も敢て思はま
 あるしめさきぬあつたる芝田友は景時及堂やらんはれ
 鎌倉に所小弓寄りし事かかれり近國同意の士を
 勝武主を催し民を可責して糧を積むと大將暗愚
 して者後をのめ之遊櫛よ農務の時を棄て己は豪彊
 をその上下に傾せ及鎌倉に來れりあは威にせんも目下
 よあはと思ふ今芝田友は仕てをを剛に投るは何ぞ鎌倉に
 推挙を求よとてあはとんといふは英源二も意中の一と
 三守も賢才あるを殺しり綿上よ花を源よとて思ひを

おいては金言を真子随ふべしとあぐさめまより日毎に國中
乃傍地一見のためしらひあり一博遊は俳酒一室親小更子
整柵を固くをを殊の勢ひ社心疑ふ一才れ上敵はは
らまは草をいで鮮を鷲うは子似くまはし少刻も
まやう深念子馳かつてまのやうを言上せんと思ひ三寸
よ向ひ此居しおこと此殊のまう深念子まをへとおきむい
うまもしや身をまあは遠ひまのうせん袖つくまかり
あられどあふせれ川の目すれむくゆると之は三寸は後を
りかめ阿武隈はきりうらめてまのやうと思ひゆるま
し金玉乃は身を尾石のまう埋みまのうするまもねを
しゆるれいんれおのころまきをすまのまのうするまあり

若阿古のまを忘れたまのうをわあは遠之をうま
と懐懐とくくは後子袖を履へは美原にも天神地祇は盟て
生死も俱も負るるがし是花流の刀を出しこれのまが今
よかけて秘蔵するま紐をまきと遠るまをこれ来とまよま
りくまをくはの袖よりけりかのかや系面敷りして守
まのうせんを離別此情をくく一を女もも厚く真成を
謝し旅乃凋度をおさめく教子目をつらう深念を
馳帰るま美大路の家もも美りれはま人行先まつて芝
田く社心分明の旨仔細よ言上は是は像て宮櫓西良
を討の使使く一美原二の案内者おれは前陣よまの
へまのう上意を美原王即日奥及びまを向ひたる芝田を

若阿古のまを忘れたまのうをわあは遠之をうま

若阿古のまを忘れたまのうをわあは遠之をうま

此よりを傳へて一族布從を集めて待合するに宮内少輔の
 彼地を下りて志保のくも野を立伏せしむるに芝田の館小
 押かけしるに芝田の射人を下りて射しむるに謀合勢あり
 かゆするに源二子城の馬あふをせしむるに小宮城の椰子
 の象を擡ぐもその力を全し免を擡ぐもその力を全す
 と申つるあるに芝田の敵ありとも彼の宮内少輔ありて
 ありて此口をゆるめし責めしと云捨てやめて芝田の城乃
 後子回し高尾を登りて城内をえ下りしるに源二子城の
 つめ引つて先射するに城の中を負死人多くしむるに
 芝田の子桐山忠左とふるに大力の別乃をのりて捕
 ぐに胸の腹巻を甲の緒をとりて一文むらりしるに乃擡ぐ
 乃擡ぐ

あつて只一騎うち出寄りしに今秋もちの近入人馬
 をいしに藤依南風水風寄りしに目を驚かししるに何と
 うもきん一方を打破りしるに大將芝田も殺ししるに
 負ししるに今いしをまのしと妻子を所て後切て伏ししるに
 等小森八郎も火をかけしるに煙を焼あけ猛火乃中
 飛入ししるに芝田亡びしるに國中の仕並を執志づめしるに
 此方をやむるに内源二子城の中を恐び出さすしるに
 此方動もつるに之のがれしるにやらん空家ししるに人
 へさりしるにせんかやせんかと思ふに内源二子城の凱旋を酒
 はんちるに引多てしるに謀合も及ぶしるに眞は構へし
 城主は暗愚に依て禍を衆民に負すしるに芝田の

吾民親い子を失ひし妻いまよりのきけり子趨き山よわく
右澄た性よ離れ去寸寸を母を携りて名取の里のき
をこころざして走里るか阿津櫓乃山つぎある葉下
さしか望み身より倦て一歩もすむるをたけし親子を
とらして路傍よりふやむれわらう齡もあき後乃山を
つとめて徐くと歩来れり寸寸いを後乃性をひえんれ
い芝田及乃を礼よなをのりき名取の里へまわると
りて結るがあまり小舟をなれ後傷ひと構えんと
老後眉を頻卑珠主乃罪れ連累よあへるよやと
それも途次よのあきと湯とていなり一うよ老う
むすのこのあきと後よりちいさき瓢しりりあ

くれは寸寸い濁は絶は飲てみまそ酒ありこそさ
御味ありと母よ進まき性酒を悪めいえ飲は寸寸
うらかむけてうら朗子空んを忘れい休て
謝は老後瓢をさめ名取乃里へかありと
るよ歩まくと云捨て山より山へ踏も小母の卒と
それと寸寸いあつた物飲て眠里まきを沈酔して
睡眠せるよやとせんすあくて徒守居る日
山乃智又沈芥きたる野外冥多落るよ堪か子動揺せ
ともあ絶入るやうあきとみの方見と失意とや
かやし思とも旗の葉もあく忙然し子を東渡健の
介のふりるまかくす侍らねも勝ぬちかく白

源氏は片々袖を潤して三寸の血を冷くしてけいせし人をも
 とざり多れば母は笑ふ作て哭し地を伏て哭し其後聖尊を
 凌て死骸よとまつき泣流るるを郊外に里人乃て受け
 つて之をありし時身をとりひき阿那煩しと修し
 杖を志すらまつ三寸がむちのき姿をうれば一刀よもろ
 をかけて終入るる母がまふやうそれある刀を楚忘れ
 が死人の記をとりて大切をかけぬに死もよも放りま
 その中の左之右之も汁あひてとまてさめくと泣き
 里人もよも此時返るるを捨ててさすは葬去を盡して去
 母をばとかくよすかあはれ名取乃てまづ
 送るる鳴呼人生情べー紅炉一照乃雪

三寸危難を遁て美源三再會なるまで

却説美源三國見の病は残心を引だせられて鎌倉に改
 所日三城四郎軍切乃甲乙仔細小言上し兼中より源二
 が御被那の條板を病あはれに將軍家勲功を称しあひま
 湯多く恩遇他は務るる主人行光も家乃面同じ敷ふし
 就思宿日は超たると美源三今へおしと暫時の隙を乞ひ彼
 地よりんと思惟しるる城辺の民離れ乃強勅に三寸の
 生死をいとと過慮しや合面せざる時人笑ひをせしごと
 僕をも凌れぬ指さす此旅もあはれ秋風を吹く白川乃
 園路よ再びしからるる風よ出て夜は病し移れ玉具
 乃病もも多し其れに郡邊遠近とるめがし里人よたよりて

三寸母子立不を之に里人歎息して其田反乞びすひて
後残意多く山寨は荒白益も民家も強益一はるは
國中さく不穂ありは旅客の性来も絶て生業よを負く
右に改るものあり三寸親子も各取の里乃望縁へ道れけ
といはれ給ふとくかある好音も傳はれとすよ其源二の中
女か其各取の里を圍つてろひまは彼里へとたぐるよ日
たや西山は傾き阿津横山乃新くつき郊野忍又も之は
歩きてる後せし阿丘蔭乃林の蔭よ一のせ荒堂あり少刻
憐れむやとまき破れくる床よ草折あて悔くらけ思
慮一里なききむお道向小人あきよらも月ハ此荒堂あり
一宿して氣をたはへんよい志と一毎の乾飯盡るる手推の

系不捨ふもあうりと其の小のまをかり枕よん實てくも厥れ
ハ忽西風よつれて笛聲幽よきと多松を身を傾て又よ笛の
多風とまき不憐くくると肅殺をりつと心と其時七月と王
二色其別よあきり其ハ傷別ハ法あり万物始て傷て刑法
を被る此笛の音不殺まをあつてはくそ不審一はれと
えとりえくくる折かく荒堂の梁よ叫呻きありて旅
小何やら雷あつるとのあま探てられも血くらきとをいふく
併よまらと母上を白眼で系長途よ方適荒堂よ休ひ
んゆるみ一を侮此怪をちのけやたのき狐狸乃正辭を一刀
よあつていさんと大詰よ罵罵いよのふれ多いよ其源二の悪よ
ハあつてぬやとく小らのま多いとすよあつてぬやとくよ其

上よ多きをあげて寸よらん緘のためは替められをさすけ
あといよは火源二いまとも現ともワ死うくくこつくいふま
まかきして堂内暗くしてま違ふまよ由のまるる道
まられハ二寸多きをかけおの笛乃まると歌うして芝田よ
乃家れ子桐山中をちやまのましてゆまらハ火源二まを
彼の縁念はふれり敵あるを完質高唱せり彼を討てのち
よ仔細い向ふんとまらまらまらつまらまらまらまら吹きて
舞うらかけあがくと吹すまらまらまら火源二んをやるを押
まらめ家は中まやうく吹おめて堂よままあかままあ
らかよわかふ女やわるまらまらまら今助一丈恩を志す
づくの男よみまはをまらまらまらまらまらまらまらまら

我意小廻つる生るたもあるべし吾や慈や死くく敵
死せぬいまよ女くとまらかけて操刀よまをわくるまら火源二
まらまらと観洗その男あまこれまあまま妻の敵まらまらまら
石火乃光の毛特のまらまら肩先源く切らめば申を思ひ
えがる太刀先小踊てまらまら破らまら足踏まらまら
自在ぬらけかへ刀をわらひわらば堂あま替て近る
まら火源二のまらまら死かまらまらまらまらまらまら
大事を足於嵐のまらまら途官氣まらまらまらまら
らん目お芝田まら舞まらまら火源二あるまらまらまら
膽よこまらまら天よ作てまらまらまらまらまらまら
かまら思ひまらまらまら首掻まらまらまらまらまら

のぼるに一方の端を繋ぐふせは昨日阿多乃乃月皎く
さし入るに破糸を縁ひく縄を切懐おろせし現れ
あつぬわし早くもえすかかて女まづ泣て詞出は原二
抱しつるに命あるを喜ひあま仔細いへくさく尋よこすい
やうく涙を拂ひ君よ別まゆせし程ちやく芝田との
えれよ原を失ひ母を推乃て路取乃里由縁へあよる
及すあつ老儀は逢て酒をめぐまきあつよ喜酒は
飲と忽沈酒して後の事さつふえつは頃更しつて身冷
息さあきさあうらえてみれし身去中よ屈曲せりこ
いかせんとい惆悵とくもさし陰方てありしよ去をあつさ
て助物を一人あま別れ花中をうけつる喜よ水よさいん

かごちのくま退んとする時中を松枝投すれ秋をさつわ
殺さんききに驚れあまし事な流流まはらうら儀て君
のさびし刀を棄棄喜を阿津操乃山塞へ將集が房中よ
仕せしや且よよ責呵ども悪をおまきつあつるは
まうおの死も未の松山彼さつさつやうたされの中をいよ
く後あつるに一扱よ二刀つさつて責殺さんと父より此
荒原の母よ結して渠の山塞よりかよひくさつる二
夜よふんぬ妻了死しつて生へき一路をえらるあよあひつ
すもかく良人は余面しつてまつるは実よ無務の契つき
さるるるしや天山北をひもてんよとあつるに
をゆえすり赤んを感念しつて承乃の上もあつる幸ひふ

月夜のしるしをいかにして鑑を対のそかひに保念の敵とて
 緘を平治せるい武乃乃冥念か〜はふ〜さる〜しお
 こころ危難奇怪乃事此母もい〜ありつ〜ん名取の里
 よ身まか〜んやひかれと机志を裂て紙を法りせ
 裏中乃葉をしくませ肩よかけて名取乃里〜中〜忙る
 のの里乃由縁と〜るい叔母ある〜の〜一〜結りて以程
 よん志あり乃林の枝からまよ里ちかくあり〜と〜るや
 向一老女乃す〜の包物肩〜る枝よ推乃て歩来ありちかく
 ようりてみまはなすう母あり子もあて〜るす〜あ〜
 泣きまむ母の忙然〜して摘縁〜う〜多をゆ〜を面を
 んして寸後我子々冥府のい〜な〜びて来まらるや〜

いやら〜ふんおこと百日小あ〜る〜遊庵の〜女里の
 糧食よ指でつる老らん此世〜か〜鶴夜泣れい寸
 も冥源二も〜理よ流せきあ〜は〜り〜と寸いんを〜
 志づめあ〜る〜事ともか〜る〜れい母の再ひ驚きみちの
 のあひすれ身よ〜る〜血此志〜を何ぞ〜かひ〜
 と且歎且悲ひ叔母の家路よ業内〜て取村里乃親
 族よもかくと活せ〜人〜寸が再生〜たるを喜び又
 冥源二ハ鎌念よさ方名の士〜中を〜る〜ふ〜ひ〜
 民集て食乃ため山川の〜味を盡〜して学敵〜
 か〜る〜の〜返村の農夫等〜これ〜ひ〜集たる〜
 印〜る〜れ〜ま〜あ〜し〜る〜候を〜あひ入る〜あ〜



茶道守巻二

三守一丸をふりて酒をあひくし一俵なりといふ俵を元示として
 婦人酒の醒るるをさそへ一やそれ婦人の濁りのどし事々危
 さまちあまあやまりて酒の醒る程を示さるより小百餘り
 よふりぬれぬ婦人を防ひ俵を謝せんといはるる事々
 とつよふ人々愧怪の思ひをあたはし原二まらわくあて老
 俵の風骨丸庸を仔細ぞ有つんと先三守が危難よ
 あひくし中を討しるまきかつるまきるまきるまきる俵の
 毒一酒の世れをちさるるれ討しさよあまきるまきる老俵
 終て歎息し一五老矣ある酒をまきる世人の疑惑の
 全極せるまきる源をきさんまきるまきるまきる俵の
 檀の契淡くまきるまきる一玄星光院乃助公といふまきる

あり茶室をわづらひて國家こきりく謙愈殿のため
 小減亡一さそへかまはれ大夏高堂灰燼となり救町の郭地も
 小寂寥し一て飄々たる秋の風小暑昔遊宴乃好を追想
 むし一まきるまきるまきるまきるまきるまきるまきる
 と思ひのあまきるまきるまきるまきるまきるまきるまきる
 小召きつれしもまきるまきるまきるまきるまきるまきるまきる
 一かまきる宝塔伽藍も大破一世れ中も入夏事々思ひて
 より俗藝をのたまはれ月所津櫻乃山住まきるまきるまきる
 か乃多銀を煉て黄金と一丹を煉く版一凡骨を換
 白日よ上天して愚俗を感以道家れ術のまきるまきるまきる
 穀を辟て本食一松風よ耳目を清し一ゆるありけを酒

をたぐむの一癖ありて一飲百日れ酔をち酒を醸る白粥
をたてたまを生涯の珍品とせりすて不婦人よあていれ
ありその夜も庵に改て母子多う禍にあつるを傷悼し
ゆまし不世回り帝從相山中古と名のるに戰場を道て老
よあつて助命を乞ふ不祥果と昔倭に庵よとめ心事
うらむく吃してかへぬれい原穴竊よ同ト山の洞穴に筑
堂を築又も石良の心を愛し一民屋に強盜に手懸糸
をるる小忍び心をかて恨心とあふかたをだてををえれ
ハ半牛の間は世系事あつる何さぬ室母乃精上て天子傲
うとむとり言せしををやくも中をこれ言をひめて老よ
そ左西をよ不果が邪念を悪むといへともあへるるを

老う罪ありと名ふより必承の星ぞや告しふ今を
あつたり婦人よかゝる禍を負せしめはくあゝ宿業よや
これ皆老う罪あるとさるるもて虎狼足下此多よ亡び良民の
毒ひこまよるるべし後童賞れ下よ必勇まあるとと林登言
んくよ別を乞て去る原二はめを俣乃清白あるを感
賞しやぐり村里北社を急ぐと山塞よ押さくれハ
洛緘等道よ伏て叩頭血を流し罪を謝して助命
を乞ふ原二洞穴へすみ入らんせし時裏より
助公老俣乃然の去刀を推り出て曰中を謙恭の言
乃珠を飯んとして害を拒し思ふよ足下婚儀乃
加美子残緘ホか命を思老よとびひあんと去刀を後

せむら原ニせ完示とて諾一城徒ホを返放ち山
寒子火をかけ老婦小別を告里民率ひて里子返
良辰を多くと母子を推ひて鎌倉へ在ひの詔を乞
寸々執族をほり免村里老幼景慕して境をか
りるとこの山寒此洞穴の救百歳力の名書
ありて今よりくり傳

圃老巷説菟道室巻二終





